

(別紙)

中国文化のイスラーム受容に関する研究  
——主に比較思想の視点から  
論文要旨

長谷部茂

本論は、中国イスラームが1350年間にわたり、度重なる王朝の交替と圧倒的な漢民族の影響の下で、その信仰と共同体（ウンマ・イスラミーヤ）をいかに守り、存続させてきたかの理由を、回儒（儒教と教養をもつイスラーム学者）思想に表れたイスラームと儒教の親和性を手がかりに、イスラームのもつ生命力と中国文化のもつ外来文化受容性の観点から解明しようとするものである。

中国のイスラーム人口は統計上約2300万人。中国55の少数民族中10民族がイスラームに分類される。うち最大の回族は1058万6087人で、全少数民族中、チワン族（1692万6381人）に次ぐ人口を占める。回族とは、イスラームを信仰する人々、即ちムスリムを指し、厳密に言えば「民族」ではない。アラブ系、ペルシャ系、トルコ系諸民族や漢民族も含まれるが、現在の中国では、宗教ではなく民族の分類とされている。

回族は、中国の歴代王朝・政権のもとで、時々の支配民族や大多数を占める漢民族と、常に不即不離の関係を維持してきたが、その間、排他的意識が消えることも、理解が深まることもなく、「大分散、小集中」と言われる浮島のようなウンマ（共同体）を形成し、1000年のスパンで見れば基本的に漢民族をはじめとする他の民族と平和裏に共存してきた。

回族はなぜかくも長期にわたり中国に存続しえたのか。言い換えれば、中国文化はなぜ回族を受容してきたのか。本論では、その理由を解明するために、次の五つの方面から検討した。

- 一、イスラームの生命力（イスラーム教圏拡大のファクター）と中国への浸透
- 二、定住ムスリム（回族）の形成と発展——信仰・共同体存続のための営為
- 三、中国イスラーム社会の特性
- 四、イスラームと儒教の親和性
- 五、中国の外来文化受容と中国文化の特性

一、イスラームの生命力（イスラーム教圏拡大のファクター）

中国におけるイスラーム存続の最大の理由は、イスラームそのものの生命力にある。イスラームの中国への影響を、イスラーム拡大の5つのファクター（宗教、貿易、軍事、文芸、移民）から検証した。唯一宗教ファクターは、これまで、イスラームから中国へというベクトルでの影響が、ほとんど無視されてきたが、筆者は、回儒思想の分析を通じて、

新儒学と称される宋代の朱子学や明代の陽明学が、イスラーム思想の影響を受け、それまでの儒教を変質させて、新たな思想を形成したことを論証した。

5つのファクターの相乗作用によってイスラームは、教義を普及させて信徒を増やすのではなく、信仰を一つにする社会そのものが広がっていくという外来宗教の新たな形として、波状的に中国全土に拡大していったのである。

## 二、定住ムスリム（回族）の形成と発展——信仰・共同体存続のための営為

漢民族王朝が復活した明代の後半以降においては、イスラームからの直接的な影響は跡を絶ち、中国におけるイスラーム・ファクターは、中国領内に定着したムスリム（回族）に限定されていく。回族は政治的社会的特権を失い、漢民族と同じ条件の下で生存をはかる境遇となり、回族の話す言葉も中国語に代わった。明代後半以降から現代までのほぼ5世紀は回族にとって、信仰と共同体を維持するための奮闘の時代である。

回族子弟に対して漢語を交えてイスラーム基礎教育を施す経堂教育の普及、ならびに回儒によるイスラーム經典の漢訳事業は、漢民族の圧倒的な影響下にあった回族の信仰と共同体維持に預かって力があつた。

## 三、中国イスラーム社会の諸相

中国各地に点在する回族社会の現状を、福建省泉州、山東省済南、雲南省及び台湾について現地調査を踏まえて分析した。回儒の存在感はいずれの地域においても希薄であり、儒教化したイスラームとして過去のものとなされていた。泉州では、大半の回族がはるか昔にイスラームの信仰を失っているが、イスラームは家譜に示された先祖の教えとしての意味をもっていた。田中逸平が1920年代にイスラームに入信した済南については、巡礼の一部始終を日記風にまとめた自著『白雲遊記』の記述を追いながら、ほぼ一世紀を隔てた現在の済南イスラーム社会との比較から、回族社会の近代から現代までの変遷を示した。ムスリムの居住空間（回民小区）は狭められ、漢民族との雑居も進んでいるが、ムスリム子弟のイスラーム教育は進んでいる。

雲南ムスリムはモンゴルとともに雲南を征服した屯田兵の後裔である。開拓者としての矜持をもち、ムスリムが多数を占める地方郷鎮も各地に点在する。

台湾へのイスラーム伝来は明朝末期、鄭成功の時代である。大半は対岸福建省から移民したすでに信仰を失った回族であった。現在のムスリムは1940年代後半から、台湾に移民した国民党軍のムスリム兵士とその子孫である。イスラームを宗教と見るか民族と見るかという国共内戦以来の問題が持ち込まれ、近年の民主化、アイデンティティの形成と絡んで、複雑な様相を呈している。

宗教か民族か、の問題は、中国では統計上の「回族」の定義に見るように、矛盾したまま据え置かれている。回族をムスリムに限定すれば、多くの回族は少数民族としての優遇を失い、イスラームを宗教と見れば、キリスト教徒や仏教徒と同一のレベルとなり、優遇

を与える理由はなくなるが、ムスリムには信仰上、土葬墓地の確保やマッカ巡礼のための海外渡航許可等、漢民族とは異なる現実的配慮を要する事柄がある。ただ、祖先がムスリムだというだけの、あるいは優遇目当ての回族の存在は、信仰をもつ回族にとっては躓きの石になるかもしれない。

#### 四、イスラームと儒教の親和性——回儒思想の解明

イスラームから新儒学（朱子学、陽明学）への影響に思い至ることがなかった回儒にとって、イスラームと儒教の親和性は一つの大きな発見であり、驚きであった。回儒は、さらにイスラームと儒教を歴史的に（あるいは原理的に）遡って、儒教の源流である「礼」と、イスラームの信仰と共同体の規範であるシャリーアを同一同根と見なすようになった。回儒は確信をもって、イスラームと儒教が相反しないばかりか、ムスリムにとって儒教の理解を深めることがそのままイスラームの信仰を強固にするものだと言った。彼らはむしろイスラームに儒教を取り込み、儒教が2000年を経て失ったものをイスラームが継承していると考え、儒教をイスラーム信仰の下に統べる壮大な体系を構築した。

回儒の体系は、中国という非イスラーム国家においてムスリム（回族）が、実際には漢民族の風俗習慣を取り入れながらも、心中に矛盾や動揺を感じることなく、自らムスリムでありつづけることを保証するものであり、共同体の維持にとっては尚更に望ましいものであった。

回儒の思想をイスラームそのものとして理解し、受け継いだ田中逸平は、イスラームの視点から儒教全体を俯瞰し、更にそれを押し広げ、儒教ばかりか神道、仏教、道教、キリスト教についても、同様の姿勢で一貫する「五教帰一」を主張するに至る。

#### 五、中国の外来文化受容と中国文化の特性

イスラーム・中国間の歴史の奔流には、偶然的要素も含めてイスラームを中国に根付かせるいくつかの出来事はあったが、それを受入れ、その継続を許し、イスラームを受容してきた受け皿としての中国自身のあり方も、イスラームの存続を可能にした理由の一つである。

中国の中国たる所以は文化であり、その文化は、時々の世界の趨勢を見据えて、最良最新の異文化を取り入れ、それを凌駕し、自らその担い手となることで不断に発展する。中華とはすなわち、世界で最も優れた文化を指す。漢民族の文化ではない。唐～元王朝の時代において、イスラームは世界に冠たる最先端文化を誇っていた。イスラーム文化の中国への影響は、すでにその多くが中国文化の中に融合されて、見分けがつかなくなっているといっている。

イスラーム・ファクターの中国浸透の歴史、回族社会の形成、回儒思想に見られたイスラームと儒教の親和性から、イスラームと中国文化の間には、次のような共通性が見出さ

れた。

- 1、過不足のない十全の文化であること。人類文化のすべてを網羅、継承していると信じられている。
- 2、過去の歴史において理想を実現した文化であること。したがって過去を振り返り、復興しようとする文化である。
- 3、共同体（イスラームの場合はウンマ、儒教の場合は宗族）維持のための文化であること。つまり文化の成員たる人と社会のための文化である。

これらの共通性は、中国におけるイスラームの存続と漢民族との共存に、一定の役割を果たした。

しかし以上の諸点は、あくまで儒教を主流文化とする中国との比較である。中国は近代以降、時代遅れとされた儒教を捨てて、最先端と思われた共産主義によって統一され、現在、やはり最先端と見られる西洋の科学技術や資本主義を積極的に取り入れ、制度面でも大きな変革を遂げている。

中国イスラームにとって儒教との親和性は、新たに構築されつつある中国文化の中では、あまり積極的な意義をもたない。ときおり現れる伝統文化の再評価の流れ（文化熱）や民族主義の高揚に、儒教や仏教とともに存在感を主張するのか、あるいは近年唱えられ始めた文化の多様性の流れに乗って外来文化としてのイスラームを強調し、イスラーム諸国との交流を深めていくのか。課題は大きい。「回族」という民族でも宗教でもない身分が、彼らの微妙な地位を物語っている。

回族・張承志は、回族の命運を「三つの喪失」という言葉で表現した。第一が故郷の喪失（唐代以降）、第二が言語の喪失（明代以降）、そして第三が信仰の喪失である。仮借ない宗教弾圧であった文化大革命さえ乗り越えた回族が、1980年代以降、改革開放による経済偏重の生活の中で、信仰を失いつつあると、張は警告している。